

## 教室において教師の「声が届く」プロセスの考察

### - ワークショップを通じて現れた要因の検討 -

立命館大学大学院  
 応用人間科学研究科  
 対人援助学領域  
 家族機能・社会臨床クラスター  
 松山 洋輔

筆者は今まで教師の立場と生徒の立場の両方の立場で学校現場に入っていて、聞く姿勢のなかった生徒が教師の声に反応し引きつけられる場面に何度も遭遇してきた。筆者はこの場面を生徒に教師の「声が届いた」という表現を用い、「声が届く」を「コミュニケーションの始まり」と捉えている。本稿ではその「声が届く」要因は何なのか、どのようにすれば「声が届く」のかを探るために、教師を目指す大学生や学校現場に入ったことのある大学院生や大学教員を対象に全2回のワークショップを行い、そのワークショップで起こった「声が届いた」場面と「声が届かなかった」場面を参加者と共に振り返り、そこから現れた要因を分析していく。

章では竹田らの聴覚認知システムにおいて「声が届く」は認知レベルの前段階の知覚レベルの段階で聞き手に影響を与えているのではないかと述べている。章では竹内が声にはまだ解明できない「未知の要因」があることを示唆しており、これが「声が届く」に直結している要因ではないかと述べている。章ではワークショップ参加者の率直な意見をもとに分析していくため、ワークショップの構成や注意して行ってきたことを述べている。そして章ではワークショップでの振り返りやアンケートでの参加者の意見をもとに「声が届く」ことについて分析していった。4回のワークショップでは参加者に事前に「未知の要因」を提示しイメージしながら参加してもらい、それが何によって生み出されるのか、どのようにすれば「声が届く」のかというところを中心に分析している。またワークショップ内のビデオカメラで撮影した筆者自身の声を出す場面を自身で振り返って考察していくとともに、大学院生にワークショップ内の「届いていなかった声が届くようになった」場面を見て意見をもらうことで、分析をさらに深めていったことを述べている。章ではワークショップ後の参加者と筆者自身の日常生活での体験を通じ、その「声が届く」要因についての考察を述べている。

結果としては、『「声が届く」ことの意識化』をすることで「伝えたい気持ち」や「相手をしっかり見ているか(視線)」の要因を統合し、リラックスした状態などの精神的な内面にある要因を整え、「姿勢」や「息の吐き方」などの身体面に影響をもたらしたことが相手に声が届く「未知の要因」を生み出したのではないかと考えた。また、ワークショップでは感情面に関する要因や「声の大小」なども現れたのだが、これらの要因も声が届いてから始まるコミュニケーションでの聞き手との「関係性」を構成する大切な要因である。今回行ってきたワークショップのような「声が届く」ことを意識化するような取り組みを少しでも行えば、教室のなかで行うことのできなかったコミュニケーションを始めるきっかけとなり、学級崩壊や授業崩壊を変えていく契機にもなると考える。